【先週のメッセージより】第一列王記６章～11章、箴言３:1～12

「忠実に長く」を目指そう／ソロモンの失敗から学ぶ

●Ｉ列王記６章～10章：栄華を誇るソロモン。

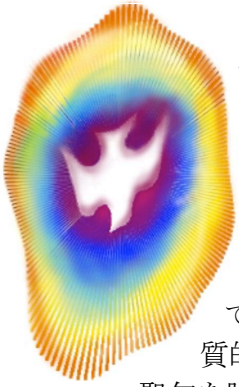
出エジプトから480年目にソロモンは神殿建設に着手し、７年の歳月をかけて完成させ、さらに１３年かけて宮殿建設も行なった。知恵を与えられたソロモンは才知を尽くして国を建て上げ、貿易を振興し、イスラエルは空前の繁栄を経験することになった。その頂点に来るのが、神殿の奉献式であった。ソロモンは、神が人が造った宮などに住まわれる方ではないことをよく承知した上で、イスラエル人達がへりくだり、神に従い続けることを選ぶならば、神が敢えてその神殿を御住まいとしてくださることを心得ていた。

●にも関わらず･･･ソロモンは大きな失敗をすることになる･･･

近隣諸国との和平のためにソロモンは多くの戦略結婚をし、正妻七百人、側室三百人にものぼった。モーセの律法において外国人との結婚はイスラエル人には禁止されていたが、イスラエルの神を自分の神としたソロモンの曾々祖母モアブの女ルツの例もある。ソロモンも恐らくは最初の頃、妻達に真の神への信仰を勧めたであろう。しかし信者でない配偶者が信仰を持つのに大変な忍耐と執拗な祈りが必要であることを我々とてよく知っている。ソロモンが躓いたのが晩年とあるが、諦め、妥協、霊的なことへの不熱心が入り込み、ついに妻達の偶像礼拝を応援するまでになる。ソロモンは神よりも彼女らを優先し、父ダビデのようには従い通さなかった。

●心を尽くして主を愛する理由

私たちが毎日、毎週、心からの礼拝をささげ、積極的に主を愛していくなら主が悲しまれることをすると痛みを感じ、悪から離れようとする力が働く。しかし形だけの礼拝やデボーションをし、そこに心が伴わないなら、次第に神の心が分らなくなって行く。我々は聖霊の宮であるが、内に住んで下さる御霊を悲しませ、消してしまう状態になってしまうのだ。「愛」は常に燃料を補給しなければ冷えてしまうという性質を持つだけでなく、「主を愛する」ということについては誰も代わりにしてくれないのだ。ゆえに、日々主を思い、主に近づこう。



【今週の暗唱聖句】ヨハネ4:24

神は霊ですから、神を礼拝する者は、
霊とまことによって礼拝しなければなりません。

「霊」と聞くと、得たいの知れない「何か」であるような気がするがそのように考える必要はない。一番簡単に「霊」を理解する方法は「人格」という言葉で置き換えてみることである。「人格」は「霊」の全てを表現しているとは言えないが、少なくともの本質的な部分は理解したことにはなる。改めてこの暗唱聖句を眺め、言い換えて見よう。「神は人格的なお方であるから、私たちも全人格を持って真心から礼拝する必要がある」となる。神はお祈りをすれば答えが出てくる「天の自動販売機」でも無ければ、スターウォーズのような善にでも悪にでもなる非人格的な「理力(the FORCE)」でもない。生きた「父なる方」である。この方を心から崇め、感謝し、この方に献身を現わして行こう。

【クリスマス（その１）　HOLLY WREATHについて】

●ここアメリカでは勿論ですが、日本でも近年クリスマスが近づくと、家々の玄関にリースが飾られるようになりました。リースを飾ることはもともとはヨーロッパの風習でモミの木やヒイラギなどを輪形の台に固定し、赤いリボンなどで飾ったりして作られます。ではそもそもリースにはどんな意味があるのでしょうか。

●先ずはヒイラギですが、葉にとげがあることからキリストのかぶられたいばらの冠を象徴し、その真紅の実はキリストの血、深緑の葉の色は永遠のいのちを意味します。次に形ですが、輪の形はとぎれることのない神の永遠の愛を象徴しています。

●リースは待降節（クリスマスの４週前）の頃からおもに玄関のドアなどに飾られ、救い主キリストを各家庭に迎える準備とされるのです。

●救い主キリストは今も生きておられ、全ての家庭に罪の赦しと喜びと平安を与えたいと願っておられます。その意味で、リースを飾っている友人・知人たちが是非、リースの真の意味を理解し救い主を心に迎えることができるよう、その方々のために祈り、福音を知らせましょう。ぜひ教会のクリスマスにも招待しましょう。